

第4話 どうすれば理想の読書空間が作れるのか

これまでの人生において、住んだ住居環境と本との付き合いを考えると、もっとも理想的だったのが、大学へ入って最初に下宿した、京都西郊のボロアパートだったかもしれない。もと鶏小屋を改造したという、トタン屋根の壮絶な平屋アパートで、雨が降るとバラバラとうるさく、窓は刑務所の独房ぐらいの小ささ（入ったことないけど）。礼金敷金なしの家賃月1万、というのに惹かれて入った。滝田ゆうが震えた線で描く、漫画のようなアパートだった。「とにかく一番安い部屋を」と探してもらった物件だったが、およそ30年前でも家賃1万は破格であった。

この下宿のことを書くと長くなるので要点だけ書くと、畳4畳半ひと間の部屋で、トイレ（とも呼べない汲み取り式）が共同、風呂なし。畳の上でアリの行進を拝むことができるすさまじい部屋だった。ここに文庫専用の本棚と、スチールの本棚と3段のカラーボックスを持ち込んで、それで蔵書がすべて収まった。というより、スペースの都合上、それが限界。蔵書数は、ざっと500～600冊ぐらいか。

あとは床に積み上げていたのだが、なにしろ貧乏だったので、現在のようにひんぱんに本を買うわけでもない。部屋にある本だけで充分だったのだ。身体を大して動かさずとも、すべての本に手が届き、何がどこに置いてあるかも完璧に把握していた。

当時はまだ古本に関して、広い関心もなく、メインは日本の現代文学、それに少し映画や音楽や美術の本が混じる程度。思えば、熱血「文学」小僧で、大衆文学やミステリなども軽蔑していた。猫の額ほどの狭い見の蔵書だった。それでも長い間、着慣れた衣服のように、「猫の額」蔵書が、本好きの若者にぴったり合っていたのである。

●蔵書量は住居環境の広さに比例する

その1000冊でも、訪ねてきた友人は「岡崎、本、たくさん持っとるのう」と驚いていたから、下宿する大学生のレベルでは蔵書家といってよかったかもしれない。クラスメートの下宿を訪ねたら、いちおうそいつも文学部なんだけど、スチールの5段の本棚に、並んだ本は上の2段だけ。中段にはコーヒーカップやグラスが置かれ、その下2段は、棚を1枚はずして月刊プレイボーイなど雑誌のスペースになっていた。悪い奴じゃなかったが、ひそかに心のなかで、彼のことを以後軽蔑するようになった。

鶏小屋改造アパートにいたのは1年ぐらい。その次に住んだのが、左京区銀閣寺参道にある旧家の離れ。ここは風呂無しトイレ共同は、鶏小屋改造「滝田ゆう」漫画アパートと同じだが、和室で8畳の広さがあった。「本がたくさん置ける！」と最初に部屋を見たときそう思った。そのうち、古本屋巡りの熱に浮かされるようになり、たちまち蔵書は増えて

いく。あたりまえの話だが、蔵書量は住居環境の広さに比例して増えていく。

同じ本を、買ったことを忘れて2度買うようになると、そろそろ理想的な読書空間も危なくなってきたのである。狭い部屋で逼塞しているときは、誰もが広い部屋に住みたい、本をたくさん置きたいと願う。しかし欲望はかぎりなく増殖するもので、これでいいと満足するラインはどこにも引けない。広い部屋に住んで、本が増え始めれば、それはそれで悩みのタネも増えるのである。

●明窓浄机が書斎の理想

長田弘の対談集『対話の時間』（晶文社）で、養老孟司がこんなことを言っている。

「本を読むと蔵書はふえます。それでいながら、明窓浄机、何もないところに本が1冊あって、それを読むというのが本を読む人の理想である。読んでしまったらその本はなくてもいいはずなのに、そうではないというおもしろさ。蔵書と読書の関係は矛盾したものだと思います」

これ、じつによくわかります。地方へ旅や仕事ででかけたとき、ホテルで荷を解いて、その夜ベッドで読む本を狭いテーブルの上に数冊置くことがあるが、本棚も何もない部屋で、その数冊がとても愛しく感じられることがある。不謹慎ながら、肺でも患って、山奥の湯治場に部屋を取り、数ヶ月、ごろちゃらと寝たり起きたりしながら、携えた数少ない本を大事に読みたいと夢想することもある。

ぜいたく、と言われればそれまでだが、あまりの量の本に囲まれてあくせく生活していると、ときにはそこから逃げ出したくなるのだ。

「明窓浄机」こそ、古来、文人が理想とする書斎のありかたであった。出典は、宋時代の中国の学者・歐陽脩の著書。明るい窓、清潔な部屋に机がある。そこで読みもの、書きものをする。

●「方丈記」に見る理想の書斎

これを実現させたのが「方丈記」の鴨長明。後鳥羽院のもと、歌人として名声を得ながら、長明は失踪のち隠遁。現在の京都市伏見区日野町あたりに、一辺約3メートル（4畳半強）の庵にむすんだ。「六十の露消えがたに及びて」とあるから、60歳の頃だった。ここで「方丈記」をはじめ、著作に専心する。

大した量ではないので、庵の内部を描写した個所を引用する（新潮日本古典集成版『方丈記』）。

「いま、日野山の奥に跡をかくして後、東に三尺余の庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、北によせて障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を掛き、前に法花経を置けり。東のきはに蕨のほどもを敷きて、夜の床とす。西南に竹の吊棚をかまへて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管絃・

往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに、琴・琵琶おのおの一帳を立つ。いはゆる、をり琴・つぎ琵琶これなり。かりの庵のありやう、かくのごとし」

ありがたいことに、この時代ぐらいまでになると、平安期の文章（たとえば「枕草子」）などに比べて、はるかに読みやすい。個々に難解な語句があっても、だいたいの意味はたどれる。

書物らしきもので名が挙がるのは「法花経（法華経）」と「往生要集ごときの抄物」。「抄物」とは「抜き書き」のこと。当然ながら、当時の書物はみな写本であり、随時、必要なところだけを書き写したのが「抄物」だろう。その他、和歌や管絃の本も一緒に、「黒き皮籠」（行李）の中に入れてあったようだ。記述を見るかぎり、本棚のようなものはなさそうだ。

とにかく、一流の知識人にして本は少なかった。

●茅屋なればこそその季節感

子ども向けに当代の人気作家が古典を現代語訳した「少年少女古典文学館」の『嵐山光三郎「徒然草」・三木卓「方丈記」』に、「方丈庵復元図」が図版で掲載されている。これを見る限り、長明晩年の庵は、公園の公衆便所くらいの大きさだ。玄関を入った脇につり棚があり、そこに本を入れた行李が置かれてある。部屋の奥、西向きに経机が置かれ、ここで読み書きをしたようだ。シンプルライフもここに極まれり。現代の河川敷に小屋を建てて暮らすホームレスのほうが、よほど物持ちだ。

現代新書編集部編『書齋 創造空間の設計』（講談社現代新書）は、学者や作家など、原稿執筆を職業とする人たちの「書齋論」を集めた本。なるほどなあ、と思ったのが西洋思想史・経済史評論家の関曠野。「方丈記」を念頭に置いていると思われるが、古来、日本の文筆家の書齋は「四畳半そこそこのわびしい庵の中のことが多かった」という。そして「日本の古典文学が概して季節や気象の変化に異常に敏感な理由も、日本民族に固有の感受性というより、その書き手たちの多くの者が、吹きさらしも同然の茅屋に住んでいたという、建築学的条件に関係していたような気が私にはする」とうがった見方をしている。

ちなみに関が考える「史上最も理想的な書齋は刑務所」。「古今東西をつうじ、獄中で力作名作をものにしたたり、生涯を決定するような読書体験をした例は少なくない」と書く。刑務所を「書齋」にした代表的な一人が荒畑寒村。

この明治・大正・昭和を駆け抜けた筋金入りの社会主義活動家は、1908年「赤旗事件」で逮捕され入獄。刑務所にいたおかげで「大逆事件」の連座を免れた。当時、獄中に持ち込める本の冊数は3冊と制限があったが、寒村は冊数増加の要求を出し、1カ月9冊を認めさせた。英語をマスターするため、バーネット訳による「ツルゲーネフ全集」を差し入れさせて、英和辞典がボロボロになるほど読み込んだという。

「大逆事件」で官憲の手により葬りさられたアナキスト・大杉栄も、「自伝」のなかに獄中

で語学の勉強をしたと書いている。

ほかにすることもなし、気を散らすものもなく、何を読もうかと迷うほどの蔵書もない。集中できるという意味では、「明窓浄机」の実例の一つが、刑務所だと言えるかもしれない。たしかに、方丈庵なんて、実用品などないに等しいから、幽閉されていない「刑務所」みたいなものだ。

●永井荷風の「明窓浄机」

「明窓浄机」のことばを使っているのが永井荷風。「断腸亭記」（1918）に、こう書かれている。

「明窓浄几の下、世と相忘れて、独り戯作の筆を走らすれば、稿の進むこと未だ幾許ならざるに、日暮既に白紙の上に迫りて眼漸く苦しみ、一日真に弾指の間に過ぎざるを嘆ぜしむ。或は古き板本机に置いて堆く、左右に積み上げ積み崩しつ、古事異聞の考証に思を傾けては、短檠の油さしさし書き次ぐ文の一枚二枚にして早くも夜更け暁近きを悲しむ」

ちょっと言葉が難しいかもしれない。「几」は「机」に同じ、「短檠」とは台座が箱になった低い灯台のこと。電灯がない時代、これを引き寄せて読み書きをしたのですね。

1918年は大正7年。秋庭太郎によれば、震災から昭和改元の頃まで、荷風の創作活動は沈滞期に入り、もっぱら「江戸明治の儒家文人の考証方面の仕事に専念」する。この時期に書かれたものに「几辺の記」がある。文人趣味に耽溺し、正宗白鳥から「荷風老ゆ」と批判されたりもした。引用の文章にも、騒々しい世の中から背を向け、机に向かい、古い書物を繙き、旧世界へ沈殿していく様が表れている。

ここで注目したいのは、古い本（ここでは和本でしょう）を「机に置いて堆く、左右に積み上げ積み崩しつ」という件。これは、紀田順一郎さんの説だが、「つまり、ここで重要視されているのは明窓浄机という表現にシンボライズされる空間だけであって、それ以外の機能的な要素、つまり書棚など整理用具の能率的な配置といったことはまったく考慮の外にある」（『書齋生活術』双葉社）というのだ。

「明窓浄机」という思想には、どうやら本棚は含まれていないらしい。ある意味、本棚を持つようになった時から、書齋は墮落する。そこに、本を並べたいという所有欲が生まれるからだ。いや、あくまで理想の「書齋」の話である。どんなことでも理想どおりにいくもんか。

●机の回りに積んだ本こそ生きる

しかし、結局、仕事をする（この場合、ものを書く、調べるの意味）とき、机の回りに必要な本を揃えておくのが肝要であることは間違いなく、生きるのは、手の届く範囲に置かれた本なのだ。

前掲書の『対話の時間』で、長田弘はこう言う。

「本を置くというと、とにかく図書館のように本をならべてきちんとして置くのが理想みたいに考えられやすいんだけど、個人の原則からいえば、本はいつも手の届くところに置くのが理想じゃないかなって思うんですね。(中略) もっとものぞましい本の置き方ということになると、結局あらゆる住まい方においてものぞましいのは、どんな設計も無視して、身のまわりに積んでおくこと」

誰だったか、ある作家が、西洋式の机に向って仕事をするより、大きな座り机（あるいはテーブル）の方が、手の届く範囲に資料や本を置いておけるので便利だ、という意味のことを書いていた。これはたしかにその通りだと思う。

私はパソコンに向い、椅子に座って仕事をしているが、結局、手足のように使える本は半径1メートルぐらいの範囲に引き寄せてある。それらは本棚からはみ出し、机の上にも積み上がり、足下や床にもいくつも本の塔ができていて、それは全体の蔵書量からすると、消費税率に満たないぐらいの数字かと思うが、これこそ仕事に活かせる大切な本なのである。

問題なのは、机のまわりに積み上げられた本と、格納庫たる本棚との循環がうまくいかないことだ。目の前の仕事が終わって、用済みになった本はもとの本棚に収めれば、またあらたに必要な本を、身の回りに待機させることができる。ところが、そのときには収めべき本棚はすでに満杯で、本棚の前にも床から積み上げられた本の壁ができていて、用は済んでも、帰るべきところがないのである。

こうなると、本棚はあってもなくても同じで、ただ手元に引き寄せた数百冊の本だけが、真に有効利用できる資料ということになってくる。そうなると、わが21畳の地下室に、古本屋一軒を引っ越しさせたような書庫とは、いったい何だろうと思えてくるのだった。